

北インド農村における経済交換と社会関係

—— ウッタルプラデシュ州ハルドイ県の事例から ——

鹿 野 勝 彦

- | | |
|-------------------|--------------|
| 1 はじめに | 4 経済交換の社会的意味 |
| 2 地域の概況—ロダウラとその周辺 | 5 おわりに |
| 3 ロダウラにおける経済交換 | |

1 はじめに

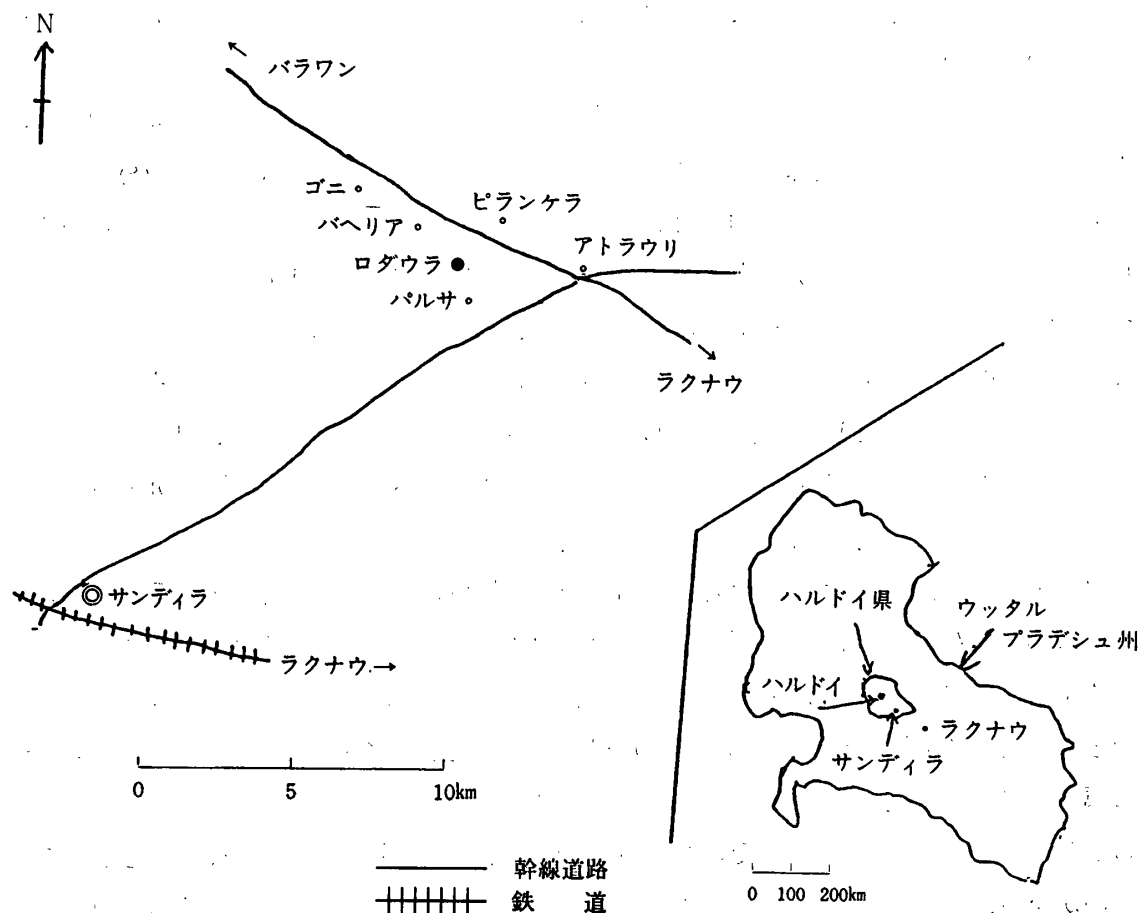
本稿ではインド北部、ウッタルプラデシュ州ハルドイ県 (Hardoi District) サンディラ郡 (Sandila Tahsil) 東北部に位置する農村ロダウラ (Lodhaura) とその周辺での実地調査の資料に基づいて、村落レベルでの住民の経済的交換の実態を記述し、その交換がもつ社会的な意味を分析することを、当面の目的とする。¹⁾

インド農村地域における経済的交換と社会構造の問題については、WISERの先駆的業績以来、異カースト成員間の関係を中心に、いわゆるジャジマニ・システム (*jajmani system*) 論をめぐって、資料の蓄積と理論的検討がなされてきた。²⁾ 一方、同一カースト成員間の問題としては、特に婚姻や姻戚関係にある者の間での贈与を中心に、研究が進められてきた。³⁾ そして、近年ではそれら2つのテーマを統合的に把握し、贈与を含む経済交換と、それにかかわる人々の社会関係を、交換そのもののもつ意味を手がかりとして理解しようとする試みがなされるようになってきたといえる。⁴⁾ 本稿の目的も、問題を世俗的な範囲に限定しつつ、このような流れに沿って、具体的な資料を提示し、検討することにある。村落と都市との関係を含む、地域間レベルの交換関係の問題を扱うことは、当面の本稿の課題をこえる。

以下の本論では、まずロダウラとその周辺地域の概況についてのべ、ロダウラの世帯を主に経済的視点から大まかに分類する。ついで、その分類に基づき、それぞれのカテゴリーに属する世帯の経済交換のありかたを、具体的に見てゆく。この交換には、貨幣やもの、サービスなどの相互的取り引きとともに、それらの一方的贈与をも含めており、また、異なるカテゴリーに属する世帯間の交換のみでなく、同一カテゴリーに属する世帯間の交換も扱うことを、あらかじめあきらかにしておく。その後、これらの交換が社会的にどのような意味をもっているのかを、交換の当事者についてのみでなく、それを周囲から見る第三者の評価についても視野に入れながら、考察する。そして最後にここで扱った事例が、北インド農民社会の経済交換と社会関係のありかたを考える上でどのように位置づけられるのかを検討する。

2 地域の概況—ロダウラとその周辺

本稿が直接の対象とするロダウラは、サンディラ郡東北部のバラワン開発区 (Bharawan Vikaskhand) に属する行政村ロダウラを構成する自然村である。行政村としてのロダウラは、1981年の人口統計によれば世帯数116、人口637人で、この地方の行政村としては比較的小規模な部類に属する。⁵⁾しかし、この地方の行政村は、一般にはかなり多くの数の、個別に独自の名称をもつ自然村から構成されており、それら自然村の世帯数が100をこえることは少ない。これに対し、行政村としてのロダウラは2つの自然村 (ロダウラとアンドプール Andhpur) から構成されており、自然村ロダウラの世帯数は調査時点で116あって、この地方としては標準以上の規模をもつといえる。以下では、ロダウラとは、自然村としてのロダウラを指すこととする。



図—1 ロダウラ位置図

景観的には、ロダウラは平原上に立地する、不整形ではあるがしっかりとまとまった集村で、周囲の土地はほぼ開墾しつくされており、荒地、森林などはごくわずかしが残されていない。

	ha	%
面 積	125.05	100
耕 地 (灌 溉 地)	10.12	8.1
〃 (非灌漑地)	95.51	76.4
非耕地 (可 耕 地)	8.90	7.1
荒 地、 池	10.12	8.1
森 林	0.40	0.3

表一 I ロダウラの土地利用 (1981)

(資料: The Census of India 1981)

近くに自然の河川はなく、運河がこの近辺の主要な水源となっているが、ロダウラには直接はその水はひかれていないので、灌漑には溜池が、日用水には釣瓶で汲み上げる井戸が、主に使用されている。⁶⁾

舗装道路は、ロダウラの東南と北、それぞれ1～2kmのところを通過しており、この2本の道路が交差するアトラウリ (Atrauli) へは、ロダウラからは5kmたらずである。アトラウリはこの地方の交通の要地で、サンディラとは日に十数便の、またウッタルプラデシュ州の州都ラクナウ (Lucknow) とも数便のバスが往来している。⁷⁾

ロダウラを中心に半径5kmの円を描くと、少なくとも18の行政村に属する、90をこえる自然村がその範囲内に入ってくるが、アトラウリはその中で最大の集落で、戸数およそ220戸あり、警察署、郵便局、中学校、2つの銀行と約40軒の常設の商店がおかれているほか、週3回(火、木、土)定期市(ハット *hat*)がたつ。ただ、アトラウリの発展は、道路とバス路線の開通にともなう最近のことで、周辺に住む人々は、それはなお町(ガンジ *ganj*)とよぶにはふさわしくない集落であるという。⁸⁾

この範囲内には、アトラウリの他に、さらに2ヵ所で各週2回、定期市(バヘリア Baheria, 火、金、及びゴニ, Goni, 水、土)が開かれている。大部分のロダウラの人々にとっては、日常的な行動圏はほぼこの範囲内であり、その外部へ行く機会はかなり限定される。⁹⁾本稿でいうロ

ダウラの周辺とは、おおよその範囲を指している。

ロダウラの調査時点での人口はおよそ630人、¹⁰⁾世帯数は116で、13のカースト(ジャーティ *jati*)に分かれている。¹¹⁾ロダウラの世帯の職業構成をカースト別にまとめると、表-2のようになる。多くのカーストが、いわゆる「伝統的なカーストの職業」をもつことは、この地方でも妥当するが、それは必ずしもあるカーストの成員が、その「伝統的」職業に実際に従事していることを意味しないのも、周知のとおりである。たとえばロダウラでは、ブラーマン (Brahman)

カースト名	「伝統的」 職業	世帯 数	実 際 の 職 業								
			(1) 地主	(2) 自作農	(3) 「伝統的」 職業	商業	小作	農業労働	その他の 賃労働	(3) 資産収入	なし
ブ ラ ー マ ン	司 祭	29	6	22		1					
					1	3	2		2	3	18
カ ヤ ス タ	書 記	3	1	2							
						2					1
ヤ ダ ヴ	牧 牛	5		5							
						1	1				3
バ ニ ア	商 業	7		7							
					4	4 ⁽⁴⁾			2		1
バ ラ イ	大 工	9		1	7				1		
				2			5				2
ナ ー イ	床 屋	9		1	7				1		
				5			3				1
テ	油 搾 り	3		3							
							2	1			
ブ ル ジ	穀物焙煎	1			1						
						1					
カ ハ ー ル	水 運 び	3					3				
				3							
ア ラ ク	葉の食器製作	29		11		1	5	12			
				11			10	6			2
⁽⁵⁾ チ ャ マ ル	革 加 工	12			1		6	5			
				9	1	1					1
⁽⁵⁾ ダ ヌ ク	竹かご製作	5			5						
							2	3			
ム ス リ ム (ダルジー)	仕 立 て	1			1						
								1			
合 計		116	7	52	22	2	14	17	2		
				30	6	12	25	11	4	3	29

表-2 ロダウラ、カースト別の職業構成 (上段一世帯の主たる職業)
(下段一世帯の重要な副業)

(1) 自作しない (2) 一部を小作に貸し、ないし農業労働者を雇用する世帯を含む

(3) 金貸し、牛の貸しつけなど (4) 「伝統的」職業が商業のため重複 (5) 指定カースト

のほとんどは司祭職を行っておらず、地主ないしは自作農であるし、アラク (Arakh) やチャマル (Chamar) の大部分は、小作農民、農業労働者であって、木の葉の皿の製作、動物の屍体処理や皮革製品製作などは行っていない。しかし、一方、ナーイ (Nai)、バライ (Barhai)、バニア (Bania) などのカーストに属する多くの人々は、ここではなお、それぞれの「伝統的」職業を、主な職業、ないしは重要な副業としている。

ロダウラを含むこの地方の村落の基本的生業は農業で、主作物は人々の主食であるコメ、コムギ、各種の雑穀や豆類などである。このうち、コメとジョワール (*jowar*)、バジュラ (*bajra*) などの雑穀は夏作 (カリフ *kharij*) として、コムギや豆類 (チャナ *chana*、ムーング *moong* など) は冬作 (ラビ *rabi*) として作付けされる。土地を所有する農民は、まず自家消費用の食糧の確保を主目的として作物の作付けを行い、余剰分を後述するさまざまな方法で交換、換金する。この地方でも一部の土地に余裕のある上層農民は、ピーナツ、サトウキビ、マンゴー、グァバなどの、都市や遠隔地市場を対象とする換金作物栽培を行っているが、ロダウラとその周辺には、現在までのところ、本格的に換金作物栽培を行っている世帯は存在しない。¹²⁾

この地方では、世帯の規模や土地の質にもよるが、一般には2ヘクタール程度の土地を所有していれば、農家として自立してゆける、すなわち自家用の食物を確保し、余剰の交換によって生活必需品を入手できる、とされている。ロダウラの場合、この水準に達しているのは全世帯の3分の1弱で、それらの世帯が全耕地の約80パーセントを所有しており、カーストとしては、ブラーマン、カヤスタ (Kayastha)、ヤダヴ (Yadav) と一部のバニアの成員に限られるが、中でもブラーマンは、この村の、いわゆる「支配的カースト」¹³⁾の地位を占めている。

ロダウラには、大規模な不在地主は存在せず、土地所有や地主－小作、自作農－農業労働者の契約、雇傭関係は、ロダウラ内部では完結しないが、ほぼ前述の周辺とよんだ範囲内でなされている。小作、農業労働には、ほとんどのカースト成員が従事しているが、ここではその主要なない手はアラク、チャマルの2つのカースト成員である。一般には労働力の供給は常に需要を上まわっており、農民は農繁期でも、必要なときにはいつでも労働者を確保できるといわれている。賃金もかなり安く押えられており、したがって一般に地主は、小作と年間ないし耕作期ごとの契約 (いわゆるバタイ *batai*) を結ぶより、必要に応じて農業労働者を雇うほうが有利であるとされている。¹⁴⁾ また、小作契約は、各期ごとに双方で自由に打ち切れることになっている。しかし現実には地主－小作関係はかなり安定しており、しばしば世代をこえて、継承、維持されている。ブラーマンの中には、必ずしも自ら耕作できないほどに広い土地を所有しているわけではないが、むしろ耕作作業 (特に犁を扱う作業) をさまざまな理由から忌避し、小作契約を結んだり、農業労働者を雇ったりする者が少なくないが、この点は後に検討する。

ロダウラとその周辺には、農業を主たる職業としながら、自らは全く、ないし自給できるだけの土地を所有しない世帯も多い。その一部は、この地域の定期市などでの販売を目的とし

て野菜を専門に栽培するが、これは少数の特定カースト成員に限られており、経営規模も小さい。¹⁵⁾その多くは、多少とも小作、農業労働者としての収入によって生活を支えており、したがって、必然的に土地を所有する地主、自作農に依存している。このような世帯は、テリ (Teli)、アラク、チャマルなどの、ヒンドゥー教の浄―不浄の観念体系の下位に位置づけられる諸カーストに多く見られるが、バライ、ナーイなどの一部にも存在する。

農業以外の手工業やサービスを主たる職業、ないしは重要な副業とする世帯は、ロダウラとその周辺にもかなり存在するが、その内容はほとんどが、いわゆるカーストの「伝統的」職業であり、表-2に示されるバライ、ナーイ、ブルジ (Bhurji)、ダヌク (Dhanuk)、ダルジー (Dariee) などの他、近隣の村ではクマール (Kumhar 土器づくり)、ロハール (Lohar 鍛冶屋)、ドビ (Dhobi 洗濯屋)、ソナール (Sonar 金銀細工師) などの諸カースト成員の場合がそれにあたる。彼らの製品、サービスに対する需要は、村内ないし近隣の農村地域にほぼ限られており、そこからの収入は、多くの場合、それだけで世帯を維持するには不十分である。したがって彼らの多くは、なんらかの形で農業にも従事している。

商業についても、手工業などと事情はほぼ同様で、地主、自作農(特にブラーマン)の収穫物(主に穀物)の販売をうけおうバニアをはじめ、¹⁶⁾さまざまなカーストに属する相当数の世帯が、小規模な商店経営、定期市まわりの行商などを行っているが、それらのほとんどは副業としての域を出ていない。

農業以外の賃金労働は、都市との間の交通手段が現在ではかなり整備されてきており、また近くにアトラウリのような、地域の行政、経済などの中心地が形成されつつあるにもかかわらず、ロダウラとその周辺では、なお直接的には重要な役割をもっていない。ただ、この地方からラクナウをはじめとする都市部へ、さまざまな職種で、長期、短期の出稼ぎに行く人数は、少なくない。ロダウラの出身者で、ラクナウなどで高等教育を受け、公務員等の職について、現在は都市に定住している人も、若干名いる。都市での賃労働の、この地域の経済にとっての意味は、現在のところ、その変化を直接促進するというより、むしろ人口の流出や出稼ぎを通じての送金などによって、間接的に人口過剰などに起因する急激な変化を抑制することにあるように思われる。

ここでロダウラの世帯を、経済的な視点から、すなわち職業と階層性に注目して分類すると、大きくは以下の3つのカテゴリーに分けられる。

- ① 自給レベル以上の地主・農民世帯、すなわちほぼ2ヘクタール以上の土地を所有し、自ら耕作するか、他の人々に耕作させ、そこからの収穫によって生活を維持できる世帯
- ② 手工業、サービス労働、商業などで、またはそれとなんらかの形の農業からの収入の組み合わせによって生活を維持している世帯
- ③ もっぱら小作、農業労働からの収入によって、生活を維持している世帯

カテゴリー②と③に属する世帯は、いずれも、カテゴリー①の世帯に依存していることになる。これらのカテゴリーと、カーストとがある程度相関していることは、すでにあきらかであろう。¹⁷⁾

ロダウラにおいては、全世帯のうち、①、②のカテゴリーに属する世帯の比率はそれぞれおよそ30パーセント、③のカテゴリーに属する世帯のそれがおよそ40パーセントを占めるが、このような比率は、ロダウラ周辺においても、村によって著しく異なっている。ロダウラはその周辺地域内では、すでにのべたように、自然村としては比較的規模も大きく、カースト構成も複雑な部類に入るが、集落の中には、20以上のカーストからなる200以上の世帯をもつ集落から、1つのカーストのみからなる10世帯前後の集落までがある。¹⁸⁾しかし、これらの集落を構成する世帯は、おおむね先に分けた3つのカテゴリーのいずれかにあてはまると考えてよく、したがって世帯間の経済交換のありかたも、村内でのそれがどれほどの比重を占めるかは別として、地域レベルでは本質的に共通していると考えてよい。

そこで以下では、ロダウラの、3つのカテゴリーに属する世帯それぞれの経済交換のありかたを、具体的に見てゆくこととする。

3 ロダウラにおける経済交換

(1) 自給レベル以上の地主・農民世帯

ロダウラでは、第1のカテゴリーに属する世帯は、すでに述べたようにブラーマン、カヤスタ、ヤダヴと、バニアの一部に限られるが、¹⁹⁾ここでは主にブラーマンの例を中心にのべてゆく。

これらの世帯の主要な収入源は、基本的には、その所有する土地を自ら耕作し、ないしは小作させて得た穀物であり、そこから自家消費分を除いた余剰が、交換にあてられる。一部の世帯では、賃金労働(公務員など)、商店の経営、資産の運用(金貸し、トラクターや牛の賃貸し)などを通じて、直接、現金収入を得ているが、それらの収入は現在までのところ、副次的なものにすぎないといってよい。

余剰生産物の交換には、大きく分けて2つの形がある。その第1は、穀物そのものを、直接、ものやサービスと交換する(ないし贈与する)形であり、第2はそれをなんらかの方法で換金する形である。後者の場合、そこで入手した現金が再びさまざまな形の交換に使用されることになる。

まず、前者について見てゆこう。年2回の収穫期に、収穫物の一部は、慣習に従って農民の世帯に一定のものやサービスを提供してきた、何種類かの、いわゆる「職人」カーストの世帯に対して、一定量ずつ支払われる。この、ものやサービスを提供する世帯はプルジャン (*purjan*) と呼ばれ、穀物で支払うジャジマン (*jajman*) との関係が、いわゆるジャジマニ関係である。表-3は、ロダウラの比較的豊かなあるブラーマン農民の世帯が、現在結んでいる、ないし、かつて結んでいた、ジャジマニ関係の一覧である。

	相手(ブルジャン) カースト	相手の 居住地	受けとるもの、 サービス	支払い	贈与	その他
定期的 にも、 サービスを提供	バニア	ロダウラ	穀物売却のとりまとめ		儀礼時に食物	穀物の買手より購入額の2%の現金。 かつて、買物の代行
	バライ	ロダウラ	木製品の修理	年2回穀物 (各1マウンド)*	祭礼時 儀礼時 } に食物	
	クマール	ピランケラ	年4回各種の土器	年2回穀物 (各1マウンド)		
	ロハール	パルサ	金属製品の修理	年2回穀物 (各1/2マウンド)		
	ナーイ	ロダウラ	週2回ひげそり、調髪、月1回女の爪切り、メッセンジャー、産婆	年2回穀物 (各、男の成人1人) につき1マウンド } 現金	祭礼時に食物 儀礼時に食物、 衣服など 年1回衣服など	ナーイの女性(ナイン)のサービスを含む
	チャマル	ロダウラ	皮革製品の修理	年2回穀物 (各1/2マウンド)	祭礼時 儀礼時 } に食物	
	ダヌク	ロダウラ	年2回各種竹製品 儀礼時のドラマー、産婆	年2回穀物 (各1マウンド) } 現金	祭礼時 儀礼時 } に食物 年1回衣服など	
儀礼時のみ提供	ブラーマン (パンディット)	ロダウラ	司祭	現金、衣服など		支払いと贈与の区別困難
	カハール	ロダウラ	儀礼時に水運び	現金	儀礼時に食物	
	アラク	ロダウラ	儀礼時に木の葉の食器	現金	儀礼時に食物	しばしば農業労働者として雇用
かつてのブルジャン	テリ	ロダウラ	油搾り	油かす	儀礼時に食物	現在は関係なし 油は市から購入
	ブルジ	ロダウラ	穀物焙煎	焙煎した穀物の1/10	儀礼時に食物	現在は関係なし、主にアトラウリで焙煎、現金支払い
	ドビ	パルサ	洗濯	年2回穀物 (各1マウンド)		現在は関係なし 自宅ですべての洗濯
	ダルジー	ロダウラ	仕立て	現金	儀礼時に食物	現在は主にアトラウリで仕立て、現金支払い

表-3 あるブラーマン世帯のジャジマニ関係

*マウンド (mound) ≒ 20kg (ただし地域差あり)

プルジャンがジャジマンに対して提供するものは、製品としてのもの(クマールの土器、ダヌクの竹製品)、ものの修理(バライの木製品、ロハールの金属製品)、サービス(ナーイの調髪・ひげそり、バニアの農産物取引代行)などさまざまであるが、それらはいずれも、必ずしもジャジマニ関係によらなければ入手できないわけではない。土器、竹製品などは定期市で購入できるし、木製品、金属製品の修理サービスも同様である。また、任意のバライ、ロハールなどを家へ呼んで修理サービスをさせ、その度に現金で支払うことも可能である。バニアによる穀物取引については後述するが、これも仲買人を直接、家へ呼ぶこともできる。ナーイのサービスにしても、市へ行くなり、任意のナーイを家へ呼ぶことが可能である。つまり、ブラーマンの儀礼サービスを含め、特定カースト成員によって提供されるものやサービスは、この地方の住民にとって、生活を維持する上で、欠くことのできないものであるには違いないが、それがジャジマニ関係を通じてでなければ入手できないということは、まずないといつてよい。²⁰⁾ 後述する、他のカテゴリーに属する世帯の交換の実態からもあきらかになるように、実際にジャジマンとしてジャジマニ関係を結んでいるのは、この地方では基本的には農民、それも支配的カーストであるブラーマンやタクルなどの豊かな農民の世帯である。

ジャジマンである農民は、一般にジャジマニ関係を、経済的には自らにとって不利な関係とみなしている。たしかに慣習的に交換される穀物と製品やサービスを、市などでの価格と対比しただけでも、ジャジマン側が不利であるという計算は成りたつし、²¹⁾年に10回を下らない祭礼時の食物の贈与などを含めれば、そのアンバランスはなおはなはだしいものになるはずである。それにもかかわらずジャジマニ関係が維持され続けている理由については、後にあらためて検討する。

次に、穀物の換金についてみてゆこう。ブラーマン農民の多くは、注16)で述べたように、特定のバニアをトウラ (*toura*) として、穀物の換金を委託する。農民側はやはり一般に、この慣行を自らに不利なものとみなしている。すなわち、トウラは一般に仲買人と結託して価格を安く決めて、裏金を受ける傾向がある、というのである。いうまでもなく、農民自身が直接、市へ出かけてゆけば、そのような心配はないし、現在ではトウラを使わない農民も増えてきたといわれるが、にもかかわらず、不利を承知でトウラを使う農民は、なお少くない。1970年代までは、多くのブラーマンは、日常的な市での買物などもトウラにまかせ、価格などに細かい注文をつけることはしないという風潮があったという。市を通じての穀物の換金や買物といった、本来ならば市場原理が貫徹するはずの取引過程においても、ブラーマン農民はなおこの種の鷹揚な態度をとろうとしてきたことに、ここでは注意しておきたい。

いうまでもなく、農民が日常生活に必要とするさまざまなものや労働、サービスは、日常的なものに限っても、ジャジマニ関係によってのみ供給されているわけではない。主食を除くさまざまな食品や嗜好品、衣服や雑貨などの、村内やその周辺では生産されない消費物資は現金で購入しなければならないし、農業労働やその他の、プルジャンによらないサービスへ

の支払いも、現金で行わなければならない。木製品や金属製品(例えば農具)を新調する場合には、相手がプルジャンであっても、現金で支払うことになる。主に穀物を売って得た現金の一部は、それらの支払いにあてられる。

これらの消費物資の購入の場としてもっとも重要なのは、定期市である。すでにのべたように、ロダウラの周辺には3つの定期市があり、火曜から土曜までの毎日、そのいずれかで(火、土は2ヵ所で)市が開かれている。²²⁾農民世帯から市へ出かけてゆく回数は、一般にはせいぜい週1回程度で、そこで購入する品目は、通常は数日分の野菜、香辛料、タバコなどの嗜好品、石油、石けんやマッチなどの雑貨等に限られ、したがってそこで費す金額もごくわずかである。市へ行くのは主に成人男性で、いわゆるパルダ (*purdah*) の規範の下で女性の外出が厳しく規制されているブラーマン、タクールなどの既婚女性が定期市へ出かけることは稀である。²³⁾農民、特にブラーマン農民の定期市への参加は、もっぱら買手としてであり、自らが売手として市に出ることはほとんどない。市はまた、彼らにとって、友人や親族との雑談や情報交換の場であり、政治的宣伝や政府機関の広報、郵便物の受け渡しなどの場でもある。しかし、そこでの彼らの社交は、多くは立ち話程度のものであり、たとえば市の茶店で茶や食事をおごりあったり、買ったものを贈ったりといった行為は、あまりみられない。²⁴⁾

常設の商店は、ロダウラにも6軒あるが、それらは一般の家屋の一隅に、若干の商品を収納した箱やトランクなどがおかれている程度のもので、外見からは全く商店に見えないし、開店時間が定まっているわけでもない。扱う商品も、コメ、小麦粉、塩、タバコ、砂糖、茶、若干の雑貨など似たりよったりで、村人が利用するのも、不時の来客があった際などに限られている。

アトラウリやゴニなど、定期市が開かれる集落には、市場の一角や周辺にかなりの数の常設商店も存在するが、それらは農民にとっては、市の一部であり、市日以外にそこをわざわざ訪れることは、ほとんどない。

各戸を訪問する行商人はかなりいて、それぞれ布、既製品の衣服、ガラスの腕輪をはじめとする装身具と化粧品、鉄やアルミの調理・炊事具、塩や香辛料、はきものなどを扱うが、これらはいずれも定期市で入手できる品目で、かつ、商人も大部分が定期市まわりを兼ねている。市や商店を訪れる機会の少ない高位カーストの女性にとって、行商人の訪問は、自分で直接買物ができる貴重な機会ではあるが、女性のもつ現金が少ないこともあって、実際に行商人を通して行われる取引も、ごく限られている。

メーラー (*mela*)、すなわち寺院や聖地などで決まった時期に催される祭礼にともなう市へは、女性や子供を含む村人が、参詣することがあり、その際には神像や装身具、菓子、玩具など、やや非日常的な買物をする。耐久消費財、すなわち衣服やはきもの、什器などを購入するのは、一般に収穫後や主要な祭礼の前、特に冬作の収穫後からホーリー (*hōli*) までの期間など、年1～2回に限られ、その際は、サンディラやラクナウなどへ出かけることもある。

その他、農業労働をはじめ、衣服の仕立て、菜種からの搾油、穀物の精白や製粉などをはじめ

め、各種の労役やサービスへの現金による支払いも、日常的に欠かせない。

上述のような農民による日常の現金支出は、全体としてきびしく抑制されたものであるように思われる。そして、彼らの日常の消費生活全体も、きわめて質素であり、経済的にはより恵まれないはずの、後述する他のカテゴリーに属する人々のそれと比べても、あまり差がみられない。また市や商店での買物に際しては、あまり駆け引きを露骨に行うのはみっともないとされる反面、ジャジマニ関係ほどには鷹揚さは表現されないし、日常的に贅沢な服装や食生活をするこゝも、批判的に見られるのである。

これに対して、さまざまな儀礼や、特定の親族(具体的には娘の嫁ぎ先の姻族)との交際に見られる、贈与や供応などにおいては、様相は著しく異なっている。

まず、年間を通じてほぼ毎月のようにあるヒンドウ暦の祭礼に際しては、ジャジマンである農民はプルジャンや小作人、よく雇用する農業労働者などに食物などを贈るのが、慣例となっている。(表-3 参照)具体的には、プルジャンや小作人などの世帯の女性が、ジャジマン、地主などの家を訪ね、その主婦から贈り物を受けるのだが、その内容は主婦の裁量による。²⁵⁾

また、農民、とりわけブラーマン農民世帯での、結婚式をはじめとするさまざまな通過儀礼に際しても、それぞれのカーストに定められた特定のものやサービスを提供するプルジャンをはじめ、密接な関係にある小作、農業労働者などの世帯成員は、さまざまな形で一方的に、ないし少なくとも提供したものやサービスの、実際の商品価値をはるかに上まわる贈り物や供応を受けるし、²⁶⁾逆にこれらのプルジャンなどの世帯で結婚式や子供の出生などがあつた場合にも、なんらかの贈り物を受けとることが多い。ブラーマンをはじめとする上位カーストに属する農民が、プルジャンや小作などの世帯から、祭礼や双方いずれかの通過儀礼などに際して、贈与を受け取ったり供応を受けたりすることは原則としてないから、祭礼や儀礼を通じての贈与は、ほぼ一方向的になされていると考えてよい。

だが、農民にとっての贈与の相手として、上述のプルジャンや小作などの、本稿で設定したカテゴリーが異なる人々以上に重要なのは、同一カテゴリーに属する特定の親族、すなわち婚出した娘とその子供、夫やその家族などである。本稿では婚姻にともなう持参財や供応そのものについては本格的に論じる用意がないが、²⁷⁾それを別としても、婚出した娘やその子供、夫とその家族などは、日常的にも祭礼に際しても、贈与の受け手として登場する。

例えばホーリーには、婚出した娘とその子供、夫などに新しいサリーや衣服、はきものなどを、菓子にそえて贈るのが通例であるし、その他年数回の祭礼時にも、大量のプリ (*puri*) や菓子が贈られる。また娘は年に1~2回、子供をともなつて数週間から1ヵ月程度実家へ里帰りする習慣があるが、その娘が婚家へもどる際には、娘本人への現金や衣装の他、婚家の家族への衣装その他の贈り物、さらにかなり大量の食物(プリや砂糖菓子で、これらは婚家の村に住む親族やプルジャンなどに配られる)²⁸⁾などを持ち帰らせるのが、当然のこととされる。さらに娘の子供や夫などは、しばしば母、妻の実家を、何かと理由をつけて訪問するが、その時

にはできる限りの食事でもてなし、多少の現金などを持たせて帰すことも必要である。つまり男が金に困れば、最初に援助を求めにゆくのは妻(未婚なら母)の実家であり、女が新しい衣装などを手に入れようとすれば、やはり実家へ里帰りした機会にその願いを果たそうとする。これに対して、娘の実家の成員が、その婚家へ訪ねてゆくことはあまりしないし、必要があつて訪ねたとしても、用件をすませればすぐに立ち去るのが当然とされ、供応を受けることは稀である。このような、いわゆる与妻者側から取妻者側への一方向的な贈与は、結婚の成立後、かなり長期間、しばしば娘の子供が結婚するまで、日常的に続いてゆく。

ここで正確な金額の比較はできないのだが、一般にこの地方の上層農民世帯の家計においては、結婚式や葬式のような特別の通過儀礼がなかったとしても、現金支出に限ってみれば、日常的な自家用の消費物資、労役、サービスなどへの支払いよりも、儀礼や交際を通じての、それも贈与にあてる支出の方が、かなり大きいと考えてよいように思われる。そして後者の支出は、より豊かな世帯ほど一般に大きくなる傾向があり、また後述する他のカテゴリーの世帯のそれと比べれば、あきらかに、質的な差があるといつてよい。彼らにとっては、さまざまな機会に、その地位にふさわしい贈与や供応をすることは、借金をしてでも果たすべき義務であり、それは日常の消費生活のつましさと対照的である。²⁹⁾

農家経営にとっては、消費面のみでなく、生産面においても、一定の現金による投資が必要である。具体的には化学肥料の購入の他、何年かに一度は家畜(特に耕作用の去勢ウシ)の更新も必要であり、さらに乳牛、増殖用の牝ウシの購入や灌漑用ポンプ、トラクターなどの農業機械の導入、土地の買入れ、マンゴーなどの換金作物の作付けといった経営規模の拡大、生産力向上につながる投資も、理論的には可能である。しかし現在までロダウラとその周辺では、生産への投資は現状維持の水準でなされるのが精一杯で、それ以上の積極的な経営の拡大につながる資本の蓄積、投資は、あまりなされていない。日常的な儀礼や交際への支出が、どの世帯にも訪れる、普遍的な家族の発展周期上の危機である、娘の結婚にともなう持参財の放出や、世代交替にともなう息子との均分、分割相続とならんで、その重要な要因の一つであることは、疑いない。

ここではむしろ、近年、農民世帯、とりわけブラーマン世帯で顕著な、男子に高等教育を受けさせ、それによって都市で有利な職につかせようとする傾向に、注目すべきであるかもしれない。³⁰⁾彼らが都市で有利な職につける保証は必ずしもないし、仮につけたとしても、都市に居住するようになるので、村落への影響は間接的なものととどまる。しかし少なくとも高等教育を受けた男性は、婚姻において、より有利な条件を獲得する可能性が高いのである。³¹⁾

(2) 職人、商人の世帯

第2のカテゴリーに属しているのは、ロダウラでは、すでにのべたように、バニア、バライ、ナーイ、ダヌク、ダルジーなどの世帯の大部分と、チャマルの一部の世帯で、周辺の他の村では、他にクマール、ロハール、ソナール、ドビなどのカーストに属する多くの世帯が該当する。

これらの世帯の多くは小規模な自作、小作、農業労働など、なんらかの形で農業にも従事しているが、その農業からは、自家消費用の食糧も充分に確保できないという点で共通している。したがって、これらの世帯は、自家消費用の食糧の一部を、なんらかの交換を通じて入手しなければならない。

一部の世帯からは、サンディラやラクナウなどの都市へ出稼ぎに出ているが、その大部分は教育水準も低いため、建設現場の労働者、荷物の運搬人夫、リキシャ引き、小商店の使用人など、賃金も低く、雇用も不安定な職種についており、本人の生活維持が精一杯で、送金等によって世帯に積極的に貢献するには至らない、という状況にある。

これらの世帯が交換にあたって供給しうるのは、基本的にはそれぞれのカーストにとっての「伝統的」な職業によって生産されるものやサービスである。³²⁾これらのものやサービスを交換する方法は、大きく分けて2つある。その第1は、すでにのべたジャジマニ関係によるもので、交換の相手は特定の、多くは世襲的に受けついで、村内、ないし近隣の農民世帯である。第2は、不特定の相手に対し、個別にものやサービスを供給して現金で支払いを受ける形である。このカテゴリーに属するログウラの世帯が、実際にどのような交換を行っているかを、カーストごとにまとめると、表-4のようになる。

カースト名	世帯数	「伝統的」 職業に 従事する 世帯数	位置づけ		交換関係			
			主 生 業	重 要 な 副 業	ジャジマニ 関係のみ	主にジャジ マニ関係	主 に 個 別 の 仕 事	個 別 の 仕 事 の み
バ ニ ア	7	4		4	3		1	
バ ラ イ	9	7	7			2	2	3
ナ ー イ	9	7	7		5	1	1	
ブ ル ジ	1	1	1					1
チ ャ マ ル	12	2	1	1		1	1	
ダ ヌ ク	5	5	5		2	2		1
ダ ル ジ ー	1	1	1					1

表-4 ログウラ、「伝統的」職業に従事する世帯の交換関係

ジャジマニ関係においては、プルジャンである職人は、年2回一定量の穀物を受けとるが、それらは自家消費用にあてる他、余剰ができれば、市その他で換金する。祭礼や儀礼などに際して受けとる贈与も、大部分は自家消費用にあてられる。トウラとしてのバニアにとってのブ

ラーマン農民との関係も直接、穀物をうけとるのではないが、ほぼ同様で、バニアは相手の農民をジャジマンと呼ぶ。³³⁾

彼らにとってジャジマンとは、基本的には自らの生活を依存するパトロンであり、ジャジマニ関係からの収入は、単に経済的に有利なだけでなく、ほぼ確実に計算できる安定した性格のものである。もっとも、彼らの側にも、ジャジマンが一般にいう、経済的な不利を承知でプルジャンやトウラに仕事をさせている、という主張とは逆の、報酬以上の仕事を強要されているという不満をのべる者がいないわけではない。例えばログウラのバライの1軒は、数年前から数軒のブラーマン農民とのジャジマニ関係を自ら放棄し、現在では、もっぱら個別の仕事によってそのつど支払いをうける方法をとっている。

このような交換は、職人や商人が自ら店をかまえる、市へ店を出す、各戸へ行商に出る、顧客が職人の家を訪ねる、などのさまざまな形をとりうるが、いずれにせよ顧客は不特定の人々とはいえ、すべて近隣の住民である。ものやサービスの価格は、個別にはほぼ定まっているとはいえ、ある程度はその場の状況に応じて、すなわち市場原理によって変動しうる点でも、ジャジマニ関係の場合とは異なっている。表-4に見るように、このカテゴリーの世帯の多くは、多少ともジャジマニ関係に依存しているが、かつてに比べればジャジマニ関係の重要性が低下していることは、全体としては明確である。すなわち、さきにのべたバライの他、ナーイの一部やグルジー、さらに近隣のテリ、ドビなどの世帯にも、かつてはジャジマニ関係を保っていたが、現在ではもっぱら個別の仕事からの収入に頼っている例が見うけられるのに対し、現在ジャジマニ関係を維持している世帯の場合、そのジャジマンは、ほとんどすべて親の代から受けついだものであり、自分の代で新しくジャジマンを獲得した例は、ほとんど存在しない。

これらの世帯が、生活に必要なものやサービスを入手する方法について、みてみよう。彼らは、第1のカテゴリーの世帯と異なり、自家消費用の食糧の一部、ないしすべてを交換によって入手しなければならないが、その方法はすでにのべたジャジマニ関係を通じてか、あるいは個別の仕事で得た現金で市などから購入するか、のいずれかである。彼らが日常生活において、交換を通じて入手しなければならないその他のものやサービスの項目は、農民の場合と基本的には共通しているが、その内容は、一般に種類も量も質も、その経済力に応じて、より限定される傾向がある。また、それらの入手方法としてジャジマニ関係がほとんど意味をもたないという点が、農民の場合とはっきり異なっている。³⁴⁾彼らにとって、日常生活の必需品を入手する場としてもっとも重要なのは、定期市である。彼らの多くにとっては、市は自ら生産するものやサービスを換金する場でもあるから、自らはもっぱら買手として市へ出かける農民の場合と異なり、売手と買手をかねて出市することが多い。村の商店で買物をすることは稀であるし、戸別に訪ねてゆく行商人は主に農民の家を対象とするから、彼らが自分の家で行商人から買物をする機会も少ない。

このカテゴリーに属する世帯の、日常の消費生活を全体としてみれば、第1のカテゴリーに属する農民のそれとの差は、量的なものであって、質的なものとはいえないように思われる。しかし、さまざまな祭礼や儀礼に際しての消費は、両者の間であきらかに質的な差が見られる。たとえば祭礼時などに彼らが自ら特別な食物を作ったりすることは、ここでは珍しく、むしろジャジマンである農民からの贈与が、祭礼を祝う食物の中心をなすことが多い。実際に実施する通過儀礼の回数は農民の場合と比べると少なく、その規模もずっとささやかであるし、その機会に他のカースト成員に対してなんらかの贈与や供給が行われることも、司祭職を勤めるブラーマンに対する、支払いをかねたそれを除けば、ほとんどないといってよい。また、農民にとって重要な、与妻者から取妻者への一方的な贈与についても、近年では、上層カーストの習慣の取り入れとしての持参財制(特に、婚出する娘本人への相続としての性格をもつ持参財よりも、夫やその親族への贈与としての性格をもつ持参財³⁵⁾)が拡がりつつあるとはいえ、なお日常的には、娘の里帰りや婿の訪問に際しての、半ば制度化された贈与の慣行は、みられない。

要するに、このカテゴリーの世帯においては、儀礼や社交における贈与、供給などが、交換全体の中で重要な位置を占めるまでの経済的余裕自体、存在しないといってよい。したがって、積極的な経営の拡大、改善のための投資や、その前提としての資本蓄積の可能性は、その「伝統的」な職業においても(その職種自体の発展性の乏しさは別にしても)、農業においても(たとえば土地の購入)、子女への教育という面においても、現状ではきわめて乏しいといわざるをえない。

(3) 小作、農業労働者世帯

このカテゴリーに属している世帯は、ロダウラではアラク、カハール、テリの他、チャマルの大部分と、バライの一部であるが、周辺の村々ではさらにガディ (Gaddi)、パシ (Pasi)、ドビその他のカースト成員の多くやムスリムの一部が含まれる。これらの世帯の一部は、1950年代の土地改革の結果、多少の自作地を所有するようになっているが、³⁶⁾それでもなおそこからの収穫で自給できる水準には達していない。彼らの主たる収入は、自作、小作の場合は穀物、農業労働の場合は現金の形をとるが、前者はまず自家消費用にあてられる他、必要に応じてその一部が、主に定期市などで換金される。現実には、このカテゴリーの世帯の大部分は、自作、小作、農業労働の組み合わせによって生活を支えており、自家消費用の穀物を現金で購入するか、あるいは穀物を市などで換金するかは、自作、小作、農業労働のバランスにかかっている。³⁷⁾小作は農業労働に比べれば、安定した収入が見込めるというだけでなく、地主である農民から、祭礼や儀礼時にさまざまな贈与を受ける機会が多いこと、日常的にも落穂拾い、燃料・肥料用の牛糞拾いや、飼料用の草刈りなどを、地主の土地で黙認されること、などの理由から、ずっと有利であるとみなされている。いいかえれば地主側は、ジャジマン関係の場合と同じく、一般に農業労働者をその都度やとうほうが、小作契約を結ぶよりは有利であるとみなし

ているが、にもかかわらず多くの小作関係がなおかなり安定した形で維持されている。その理由については、後に検討する。

彼らの一部は、さらに零細な定期市まわりや、各戸を直接訪ねて歩く行商などによって、若干の現金収入を得ている。ムスリムの場合を除けば、彼らが扱う商品の多くは、自らのカーストの「伝統的」な職業と結びついた商品(例えばチャマルが靴、サンダルなどを扱う)か、またはどのカーストの「伝統的」な職業とも結びつかない商品(例えばアルミやプラスチック製品)などである。都市などへの出稼ぎは、ここでも、第2のカテゴリーに属する世帯の場合と同じく、直接的には積極的な役割をはたしていない。

これらの世帯も、すでにのべた他のカテゴリーの世帯と同様に、日常生活に必要なさまざまなもの、サービスを、交換によって入手しなければならないが、ジャジマニ関係はその交換の中で、ほとんど意味をもっていない。ジャジマニ関係において重要な要素である、儀礼的なサービスを受けることはあまりないし、³⁸⁾技術的に可能であれば、本来、特定のカーストの「伝統的な仕事」であっても(例えば木製品の修理、調髪、衣服の仕立て)、自分でしてしまうことが多い。どうしても他カーストに依存しなければならないものやサービス(例えば土器、金属製品の修理など)についてのみ、必要に応じて個別に職人の家を訪ね、ないし市などで入手して、現金で支払うのである。彼らにとって村内やその周辺で直接生産されない、さまざまな必需品の購入の場としてもっとも重要なのは、定期市である。行商人として市へ参加する一部の人々を除けば、彼らは、市へはもっぱら買手として参加する。彼らが一回に市で購入する品目や量は、その当座必要な最少限のものやサービスに限られるが、それだけに市へ出かける回数はかなりひんばんであるし、生活必需品を入手する場としての市への依存の度合は、第1のカテゴリーに属する農民の場合より、むしろ大きいといえる。

祭礼や儀礼に際しての消費や贈与は、第2のカテゴリーに属する世帯の場合とほぼ同様か、あるいはさらに限定される傾向がみられる。特に、主に農業労働によって生活を支えている世帯の場合には、祭礼や通過儀礼などにともなつて、富裕な農民などから贈与や供応を受ける機会も少ないし、自らがそれを行う経済的余裕もほとんどないことが多い。また、なんらかの形で積極的な投資が行われる可能性も、第2のカテゴリーの世帯の場合と同様、ないしそれ以上に限られている。

4 経済交換の社会的意味

ここで対象とする地域、すなわちロダウラとその周辺の村落社会は、基本的にはいわゆる農民社会である。³⁹⁾農民社会を構成する住民は、一般に経済的にも社会的にも、ある程度階層分化しているが、その階層がカーストと密接にかかわっている点が、おそらく南アジアの農民社会の最大の特徴といってよいであろう。

ところで、すでにあきらかなように、この地域内の経済交換の中心に位置するのは、第1の

カテゴリー、すなわち自給レベル以上の地主、農民に属する世帯であり、その大部分は、いわゆる「支配的カースト」(ロダウラの場合、ブラーマン)成員である。地域内の経済交換としてもっとも重要なのは、このカテゴリーに属する世帯と、他のカテゴリーに属する世帯の間の相互的交換、およびこのカテゴリーに属する世帯同志の間での交換(具体的には、与妻者側から取妻者側へ婚出した娘本人やその子供を含む一への一方的贈与)であり、これに比べると、他のカテゴリーに属する世帯間の交換は、副次的なものであるといつてよい。

そこで、まず、第1のカテゴリーの世帯と、第2、第3のカテゴリーの世帯の間の経済交換を、その関係のありかたに注目して分類すると、おおむね以下になる。

a₁. 地主、自作農世帯に対し、特定の手工業、サービス、商業などを「伝統的」職業とするカースト世帯が、その職業に基づいてものやサービスを提供し、支払いをうける。

両者が交換するもの、サービスと報酬の量、支払い方法は原則として定まっているが、それ以外にも地主、自作農側は折りにふれてさまざまな贈与をすることが期待される。両者の関係は固定的で、理想的には世代をこえて継承される。すなわち、ジャジマニ関係(ジャジマンとプルジャン、ないしトウラの関係)である。

a₂. 前段は a₁ にほぼ同じ。ただし、若干の「伝統的」職業をもつカーストに属さない職人、商人(主に市や各戸をまわる行商人でムスリムが少なくない)が加わる。

交換は原則として、いわゆる市場原理に基づいて、その都度、もの、サービスに対し現金で決済され、贈与はともなわない。両者の関係は、カーストを単位としてみればかなり固定的であるが、世帯レベルでは流動的である。実際の交換は定期市において、あるいは両者の一方が他方の家(店)を訪ねる、などの形でなされる。

b₁. 地主が土地(耕地)を小作に貸し、収穫の一定割合(通常2分の1)を地代として取る。地主は小作に対し、折りにふれて贈与をすることが期待される。両者の関係は、耕作期ごとに更新可能だが、現実にはしばしば世代をこえて続いてゆく。

b₂. 自作農が、1日～1耕作期を単位に、必要に応じて、農業労働者を雇い、現金で賃金を支払う。賃金は状況に応じて可変的である。自作農側からの贈与は、ないわけではないが、小作に対してよりずっと少ない。両者の関係は非固定的で不安定である。

以上の関係をまとめると、図-2のようになる。

これらの関係は、時として同じ2つの世帯の間で重なりあうことがあるが(例えば、農民がトウラであるバニアの店からものを買う、農民が小作世帯の成員を自耕地の耕作に労働者として雇う、など)、その場合にも個々の交換は、個々の関係の原則にしたがってなされている。

これらのうち、a₁、b₁においては、交換の当事者は保護者(パトロン)―依存者(クライアント)の関係にあり、交換自体は、少なくとも保護者側の主観によれば、(そして多くの場合、実

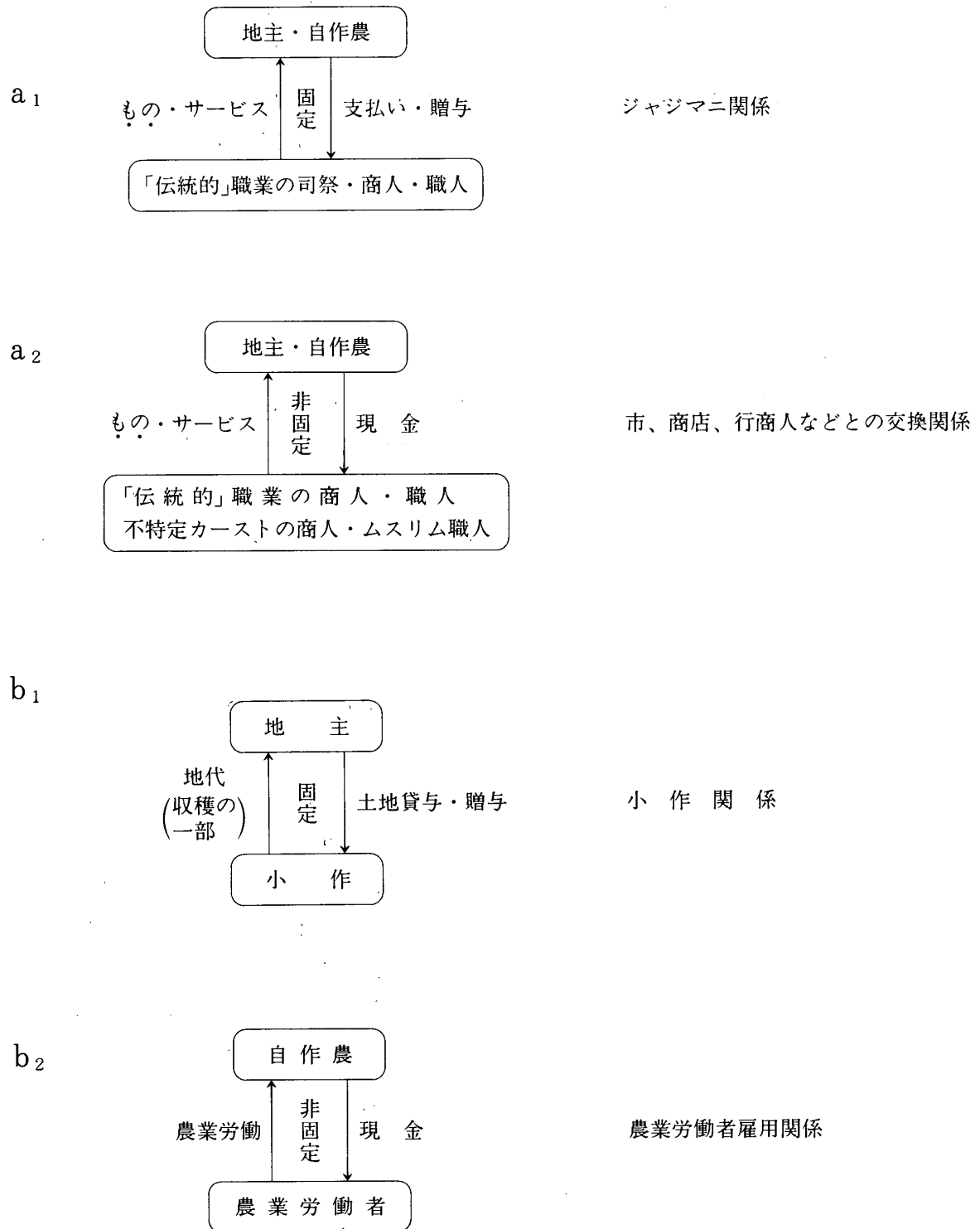


図-2 ロダウラ、異カテゴリー成員間の主な交換関係

際にも)保護者側にとって経済的に不利なものであり、彼らはそれを承知で関係を維持しているという点で、共通している。保護者は交換にあたっては鷹揚にかまえ、依存者が提供するものやサービスに細かな注文をつけないことが望ましいとされるし、依存者との関係を保護者側が一方的に断ち切ることも、よほどの事情がない限り批判的に見られることになる。

これに対して a_2 、 b_2 の関係においては、その取り引きに関する限り、両者は対等の立場にたって、駆け引きを行うことになる。 a_2 についてみれば、それは、実は、先に副次的とのべた、第2、第3のカテゴリーに属する人々が、相互に必要なものやサービスを市などで入手する関係と、重なりあっている。そして、地主といえども、そこで鷹揚な気前よさを発揮することは、必ずしも期待されないばかりか、むしろ非難されないまでも、軽侮の対象とさえなる。 b_2 においても同様であり、雇用者の農業労働者に対する要求は一般に過酷で、しばしば彼らは労賃を押さえるために、成人男性よりもわざわざ年少者を雇おうとする。そして富裕な地主(特に、ロダウラの場合、ブラーマンに属する一部の地主)は、はじめからそのような、対等な立場にたってきびしい駆け引きを行う関係には、たとえ経済的には有利であっても、なるべく踏みこまないようにしている、ともみえる。

ところで、経済的にも社会的にも優位に立つ地主や自作農民が、経済的には不利な(少なくとも、そう考えられている)ジャジマニ関係や小作関係を、自ら維持し続けようとするという傾向は、実は必ずしもこの地方に限らず、南アジア農村では、近年までかなり広く見られたようである。そのような認識にたって、なぜそういった関係が維持され続けたかを説明するために、従来から、いくつかの視点が提示されてきた。

その第1は、関係の安定性自体のもつ地主側にとっての経済的効用、すなわち農繁期の安定した労働力確保のメリットを重視するものである。⁴⁰⁾しかし、ロダウラ周辺に関する限り、このような説明はほとんど意味をもたない。この地方では一般に農業労働者は供給過剰の状態にあって、農繁期でも必要なだけ容易に確保できるし、その主要な供給源はアラク、チャマルなどのカースト成員であるから、とりわけジャジマニ関係についてみれば、地主や上層の農民のプルジャン世帯の成員と、農業労働者とが重なりあうということは、ほとんどありえない。

第2に、とりわけジャジマニ関係の存続の理由として、カーストと結びついた「伝統的」職業のもつ宗教的な浄性とのかわりを、強調する見解がある。⁴¹⁾たしかにヒンドゥー社会におけるカースト分業が、上層カーストの浄性維持を一つの焦点としており、不浄とされる行為を、一定の経済的報酬とひきかえに下層カーストに押しつけてきたことは無視できない。しかし、ここで問題となるのは、このような性格をもつカースト分業体制そのものではない。カーストによる分業自体は、この地域でもそうであるように、南アジアの多くの農村地域では、たとえば定期市のような、本来「自由な」市場原理が貫徹するはずの場においてすら、強固に存続している。⁴²⁾つまり、ジャジマニ関係を維持せずとも、カースト分業体制それ自体を維持す

ることは可能である。また、一方ではこれと逆に、カースト分業を無視する行為それ自体(例えば、市でムスリムの床屋に調髪やひげそりをさせること)は、必ずしもその本人の浄性に影響を及ぼさないのである。⁴³⁾

結局、より説得力をもつのは、ジャジマニ関係や小作関係が維持され続けるのは、それが地主や農民にとって、一般に社会的威信を保つ上で重要な意味をもつからである、という考え方であろう。⁴⁴⁾このことは、宗教的な浄性とはあまりかかわりのないトウラとの関係や小作との関係が根強く維持されていること、ジャジマニ関係の中でも、宗教的な浄性ととともに社会的威信とも密接にかかわる、女性のパルダの維持に重要な意味をもつカーストとの関係(たとえばナーイとの関係)が強固であるのに対し、⁴⁵⁾浄性とのかかわりが同じように深いにもかかわらず、パルダの維持とかかわりの少ないカーストとの関係(たとえばドビとの関係)が、少なくとも現在はあまり残されていない点などにも示されている。

ただ、ここで地主などが維持しようとする威信とは、必ずしも、従来のジャジマニ・システム論で一部の論者が指摘してきたような、⁴⁶⁾保護者による依存者への直接的な生活の保障、庇護を通じて獲得する政治的従属のみを指しているわけではない。むしろ、こういった当事者間の関係ばかりでなく、その関係を認知する周囲の人々の評価の総体が、ここでは大きな意味をもっているように思われるのである。

とりわけ浄性を重んずるブラーマンにとっても、市へ行って穀物の取り引きをしたり、買物をしたりすること自体は、とりたてて浄性を脅すような行為ではない。問題なのは、取り引きに際し、本来対等でないはずの小商人と、小額の金をめぐって対等の立場で駆け引きをすること、そしてそれを周囲の人々に見られること、なのである。そして、そのような場面での取り引きに際しての駆け引きの厳しさは非難の対象となるが、反面、そこでの鷹揚さも決して称賛的になるわけではない。⁴⁷⁾ここでは、市でもっとも活発に駆け引きを行うのは、とりたてて威信を追求する必要のない人々であり、その取り引きは、「自由」な市場交換の原理に基づいて行われる。⁴⁸⁾

ここで地主やジャジマンなどである人々にとって、威信の獲得、維持につながる交換とは、特定の相手に何らかの恩恵を与えていることが周囲の人々に公然と認知されるような支払いや贈与である。小作やプルジャンの労働、サービスへの支払いは、一方では当然の報酬でありながら、常になにほどこか「施し」、「恵み」としての性格がつきまとい、それらはさまざまな儀礼時になされる贈与とあいまって、両者の関係の非対等性をより明確にし、地主、ジャジマン側の威信を強化する。⁴⁹⁾とりわけ、儀礼時などになされる贈与や供給の質や量は、当事者のみでなく周囲の人々にとっても強い関心事であり、その受手であるプルジャンや小作の不満や批判は、与え手への批判として容易に周囲へひろまるであろう。このような一般的状況の下で、ジャジマンや地主は、「多少の不利は承知で」、プルジャン、小作との関係を維持し、一定の「施し」、「恵み」を与え続けることにより、威信を獲得し、ないし少なくともその低下を防ごうと

する。この関係において、地主、ジャジマンである人々は、理念的には、常に「より多くを与える」存在であるべきであり、その規範に反してより少ない支払いですませようとしたり、贈与を拒んだり、本来は与える対象である者から逆に贈与をうけとったりすることは、著しく威信を傷つけることになる。ロダウラの場合、このような規範を守ってゆくべき地主、ジャジマンは、多くがブラーマンというカーストに属するが、彼らがここで維持しようとするのは、あくまで世俗的な威信であって、宗教的な浄性ではないのである。

一方、プルジャン、トウラ、小作などである人々は、ジャジマン、地主などの威信を認め、従属することによって、経済的により「有利」で安定した関係を維持しようとしてきた。それは、仮に実際に有利であったにせよ、しばしばうとうしく、時には屈辱的なものであったかもしれない。したがって、プルジャン、小作などの中には、もし他に生活を同じ水準で維持してゆけるような選択肢があれば、自らジャジマニ関係、小作関係を断ち切ろうとする者もでてくる。すでにのべたように、ロダウラやその周辺でも、バライやロハールの成員で、自らジャジマニ関係をはなれ、現在ではむしろ主に定期市等で不特定の他カースト成員を顧客としながら、「伝統的」な職業に従事している例が見られる。彼らはジャジマニ関係からの離脱の理由として、ジャジマンの横柄さや、かつてに比べてけちになったことなどをあげ、市の仕事は多少不安定であっても「自由」でよい、という。

しかし、こういった「下からの」関係の解消は、現在でもなおごく限られており、むしろジャジマン、地主側からの、さまざまな理由(たとえば、経済的負担の大きさ、プルジャンなどのサービスの質への不満、相続にともなう土地の細分化の結果としての地主の自作化など)による、「上からの」プルジャン、小作の切り捨てによる関係解消のほうが、事例としては、ずっと多いと思われる。ただ、それらの関係が現在もなお多く残されているという現実、一方では、「下からの」離脱を背後から支える他の生活手段が容易に得られないことと、他方での「上からの」切り捨てに際して失われるかもしれない威信への配慮が強く働いていることとを、物語っている。

交換の性格を規定する要因としての社会的威信の重要性は、この地域でのもう一つの重要な経済交換、すなわち第1のカテゴリーに属する世帯間の贈与交換においても、同様である。すでにのべたように、この交換は、具体的には、与妻者側から取妻者側への一方的贈与の形をとるが、それらの贈与は、その一部が、取妻者の世帯からさらにその親族や小作、プルジャンなどにまで配られることに示されるように、必ずしも与妻者、取妻者双方の当事者間で完結するわけではない。また、与妻者から取妻者に贈られたものであっても、それらはしばしば、周囲の人々に認知されるような形で披露される。⁵⁰⁾一般に与妻者から取妻者へどれだけの贈与がなされるかは、やはり人々の重大な関心事であって、それが充分でないとみなされることは、与妻者のみならず、取妻者にとっても威信の低下をもたらしかねない。このことは、取妻者側が折りにふれて与妻者に贈与を要求することの正当性に対する一定の根拠となって

いるともいえよう。⁵¹⁾ただ、このような贈与は、先にのべた地主、ジャジマンから小作、ブルジャンへの支払い、贈与が、全体として、上位者から下位者への「施し」、「恵み」としての性格を備えているのと対照的に、むしろ下位者から上位者への「捧げもの」の性格をおびている。⁵²⁾この地域の上層カースト社会では、南アジアの多くの地域、とりわけ北部インドのヒンドゥー上層カースト社会一般と同じく、取妻者は与妻者より社会的に上位に位置づけられている。この関係においては、贈与の与え手としてより多くを与えることは、たしかに自らの威信を高めることにつながるが、それは贈与を与えた当の相手の従属を通じてではなく、やはりその贈与を認知する周囲の人々の評価を通じてである。⁵³⁾

ある地主、農民の世帯は、一般に与妻者として贈与の与え手にもなれば、取妻者としてその受け手の立場にもたつことになる。地位や威信の獲得、維持と、婚姻、姻戚関係のありかたをめぐる問題にここで本格的にふれる用意はないが、⁵⁴⁾ここでは、与妻者から取妻者への一方的な贈与が、双方の地位、威信の獲得、維持にとって有効かつ重要である限り、たとえそれが経済的に大きな負担であり、経営の拡大に結びつく投資の機会を制限する要因であるにしても、なお必然的に循環し続けてゆくであろうことを指摘しておきたい。

5 おわりに

ロダウラとその周辺における経済交換は、今日でもなお、かなり「古典的」な性格を残しているように思われる。すなわち、ここでは経済交換の中核には、自給用の穀物を主作物とする地主、自作農民がおり、主要な交換は、彼らと、より周辺的な存在である職人、商人、小作農民、農業労働者などとの間の交換(具体的には、ジャジマニ関係、小作関係、定期市での取り引き、農業労働者の雇用関係などを通じてのもの、サービス、労働、貨幣などの相互的交換)と、主に地主、自作農民相互間の交換(具体的には、与妻者から取妻者への一方的贈与)とに区分しうるが、前者においては、社会的に上位に位置する地主、自作農が多少とも「経済的な不利を承知の上で」、「より多くを与える」ジャジマニ関係や小作関係が、彼らの威信の維持、獲得に結びつくものとして、根強く残されている。また、後者においては社会的に下位に位置する与妻者が取妻者に十分な贈与をすること自体が、双方の威信を高める行為とみなされる。ここでいう威信とは、基本的に世俗的な性格のものであり、かつ、その威信の維持にとっては、交換の当事者の相互関係ばかりでなく、その交換に直接かかわらない周囲の人々の評価が、重要な意味をもつ。

もちろんこの地域においても、いわゆる市場原理に基づいて、自らの利益を追求しながらなされる経済交換も、存在する。定期市や商店での取り引き、農業労働者の雇用など、地域のすべての住民にとって、日常生活に必須の交換が、それである。しかしこれらの交換においてあからさまに利益を追求することは、少なくとも地主、自作農民など社会の上層に位置する人々にとっては威信を傷つける行為であり、さりとてそこで必要以上に鷹揚さを発揮しても、

威信の獲得には結びつかない。したがって、市などの場でもっとも市場原理に忠実に、自らの利益を確保すべく活発な駆け引きをするのは、社会的威信をさほど必要としない、主として中、下位カーストに属する人々なのである。

なぜこの地方では、こういった「古典的」な交換が現在も維持されているのか、その点をあきらかにするためには、具体的な資料に基づく歴史的な検討が必要であろうが、当面筆者にはその用意がない。以下では若干の仮説を提示しておくことで結びにかえたい。

「古典的」な交換のありかたを維持する要因として第1に指摘できるのは、この地域がなお、いわゆる農民社会の性格を色こく残している点である。すなわちこの地方では、商品作物の導入はなお部分的で、自給作物が主作物として決定的に重要な位置を占めている。また、都市への出稼ぎなどは、村落の余剰労働力を吸収することによって、現状ではかえって地域の農民社会的な特質を温存する役割を果たしているように思われる。

第2に、上述の点と関連して、地域のエリート層が、地主、上層の自作農といった、いわば伝統的な存在であることがあげられる。ロダウラの場合、このエリート層は、カーストとしてはほとんどがブラーマンであるが、その地位は宗教的な浄性というより、むしろ土地所有という世俗的、経済的な力に依拠している。だが、彼らの社会的な地位にともなう威信は、土地がもたらす富そのものによって、自動的に獲得されるわけではない。富は、一定の規範にしたがって、交換され、それが社会全体に認知されることによって威信に転化するし、そこでふさわしい交換を怠ることは、威信の低下に結びつくのである。ここでの規範とは、基本的には、上位者に対して捧げるとともに、下位者に対しては施すという、ヒンドゥー的な理念の枠組にてらせば世俗的な支配者の規範であるが、部分的には、下位者から一方的に受けとるという、宗教的な司祭者(ないし神、ただし具体的には、ここでは与妻者に対する取妻者)としての規範も含まれている。⁵⁵⁾

もちろん、この地域においても、一定の変化の兆しは見てとれる。たとえば、ロダウラの地主の中には、近くでの換金用マンゴー栽培の成功に刺激されて、マンゴー栽培を計画している者がいるし、地主層での近年の高等教育への熱意の高まりは、近い将来に、これまでとは異なる新しいタイプのエリート(例えば村とのつながりを維持したままで、公務員その他として、都市で高い水準の賃金や役職・地位を得るような人々)の出現の可能性を示唆しているようにも思われる。こういった変化がある程度進めば、ジャジマニ関係や小作関係にみられるような、「古典的」な経済交換は、「上から」の切り捨てを通じて、急速に姿を消してゆくかもしれない。おそらく、プランテーション的農場経営者や公務員といったタイプのエリートにとっては、その維持すべき威信を支えるものとして、近隣の人々の、ジャジマニ関係や小作関係をめぐる評価は、伝統的なエリートに対してほどの意味をもたなくなるであろう。

一方、非エリート層の側からも、「古典的」な関係の解消への動きが見られないわけではない。交通事情の改善や特定のカーストとは結びつかない、さまざまな地域外で生産されるもの

の流入と、それらの、従来は地域内の特定カースト成員によって供給されていたものやサービスへの置き換え(たとえば土器からプラスチックやアルミ製品へ、仕立てサービスから既製品の衣服へ)などを背景とする市や商店などの発展とともに、一部の人はジャジマニ関係を「下から」解消し、定期市や各戸をまわる行商人などとして、より「自由」な市場交換の場へ進出しつつある。しかしこのような転換は、一定のリスクをとまうものであり、従来からの「古典的」な関係を解消しても、なお同等以上の生活を維持してゆける選択肢が限られている現状では、当面、このような動きが変化を主導するとは考えにくい。市場原理に基づく交換の拡大、具体的にはそのような交換の場としての定期市や商店の発展などは、たしかにこの地域の近年の推移をみても、ある程度確認しうるが、そのことがただちに「古典的」な交換の衰退を意味しないことも、認めなければなるまい。

ここでのべた変化の可能性は、いずれも異なるカテゴリーに属する人々の交換についてのものである。これに対して、エリート層の内部での交換、すなわち与妻者から取妻者への贈与のもつ基本的な性格は、たとえ新しいタイプのエリート層が台頭したとしても、なお容易には変化しないのではないかと思われる。たしかに、この交換の背景には、社会的威信をめぐる「古典的」なヒンドゥー的理念の枠組が存在するが、その価値規範はおそらく、現在の南アジアでは、農民社会と近代的な都市社会とを問わず、さらにはヒンドゥー社会に限らず、かなり普遍的に存在し、かつ現在も再生産され続けているように思われるからである。⁵⁶⁾

いずれにせよ、このような変化の流れをある程度確実に把握するには、なお具体的な資料の蓄積が決定的に不足している。本稿の試みも、その欠落を埋めてゆくささやかな一步にすぎない。

謝 辞

本稿は平成元年度に文部省科学研究費(海外学術調査)を受けて行った「インド亜大陸農村における市とそれをめぐる商人集団の研究」(代表者 石原潤)の報告の一部である。調査にあたっては内外の多くの方々のご援助、ご指導を頂いた。とりわけ筆者を暖かく受け入れて下さった Uma Shankar Bajpai 家の方々、調査助手であった Pramod Kumar Bajpai, Vinod Kumar Bajpai 両氏をはじめとするロダウラ村の方々には、心より御礼申し上げる。石原氏をはじめとする調査団のメンバーには、調査期間中とその前後を通じて、有益なコメントを得た。記して感謝の意を表したい。

注)

- 1) 筆者の現地調査期間は、1989年10月下旬～12月上旬の、約1ヵ月半である。
- 2) Wiser: 1936以降の、ほぼ1960年代までのジャジマニ・システム論については、拙稿(鹿野:1977)を参照されたい。また、このテーマについての最近の問題提起としては、特に市場交換との関係を中心に論じた Fuller: 1989をあげておく。
- 3) この問題の中心テーマである持参財をめぐる1970年代までの研究動向については拙稿(鹿野:1981)

を参照されたい。

- 4) このような視点からの、近年の重要な業績としては PARRY : 1979、RAHEJA : 1988 などがある。
- 5) The Census of India. 1981 : 244-245.
- 6) ログウラ近辺での動力(重油)井戸の導入は1980年代後半になってからで、ログウラでは調査中に2基目の動力井戸が工事中であった。なお、電線は、舗装道路沿いにのびているがログウラまでは延長されていない。
- 7) サンディラーアトラウリ間のバスは1980年ごろ、またラクナウからアトラウリを經由してバラワンへ至るバスは1988年に開通した。アトラウリからサンディラーへの所要時間は約40分、ラクナウへのそれは約3時間である。
- 8) すなわち、そこが町であるためには、集落の大部分が「ちゃんとした」(*pakka*)家(石、煉瓦などで建造された家)でなければならないが、アトラウリのそれは、まだ大部分が「ちゃんとしていない」(*kacca*)家であるからという。
- 9) 例えばさまざまな通過儀礼に際して親族を訪ねる場合、収穫期に大量の収穫物を売りに出かける場合、寺院の祭礼(いわゆるメーラー *mela*)に行く場合、出嫁ぎに出かける場合、などがある。
- 10) 調査中にも若干の出生があり、また出嫁ぎ中の人数も一部正確に算定できなかった。
- 11) 116世帯のうち、1世帯はムスリムであるが、仕立屋カースト(ダルジー)として扱われているので、ここではカーストに含めておく。その他の世帯はすべてヒンドゥーである。
- 12) 特に1970年代に入ってから、サンディラーの東方地域で改良種のマンゴーの栽培がさかんになっており、近年、アトラウリ周辺でも、換金用のマンゴーが導入されつつある。
- 13) 支配的カースト(dominant caste)の定義については、SRINIVAS 以来、さまざまな論義が重ねられてきたが、ここでは単純に、その地域で、経済的な富を背景として社会的にも政治的にも支配的な影響力を有しているカースト(群)を指すこととする。この地方では、村によって、支配的カーストの地位を占めるカーストは、ブラーマン、タクル(Thakur)、カヤスタ、ヤダウなど、さまざまに異なる。SRINIVAS : 1959.
- 14) 農業労働者の賃金は、調査時点で、一般に1日10ルピー(他に軽食)、ただし少年の場合は5~7ルピー。小作の場合、条件は収穫の折半で種子、灌漑の費用などは小作側が負担し、金肥のみ地主、小作が折半で負担する。
- 15) もともと野菜の栽培を「伝統的」職業とするムラオ(Murao)と、水運びを「伝統的」職業とし、実際には池で食用のヒシの栽培をするカハール(Kahar)などがある。
- 16) 収穫物の委託販売をうけおう商人は、ここではトウラ(*toura* 計量人を意味する)と呼ばれる。トウラは通常、作物のサンプルをもって定期市へ行き、仲買人と交渉して契約を取り決め、現物の引き取りに際しては計量人を勤めて、手数料(通常、代金の2パーセント)を仲買人から受け取る。なお、定期市で、市の管理者(しばしばその土地の所有者)の下で、特定商品(例えば穀物、乳製品、粗糖など)の取り引きの計量人を勤め、取り引き額に応じて出市料にあたる一定の金額を徴収する者も、トウラと呼ばれる。
- 17) 個々の世帯の経済的位置と、その世帯の属するカーストの集団としての経済的位置とが必ずしも一致しないことがあるのは当然であるにもかかわらず、従来、この点が軽視されがちで、カーストが一般に経済的な等質集団として扱われる傾向があったことは、WADLEY と DEER の指摘の通りである。WADLEY & DEER : 1989, 93-95. 本稿でも、地域のカーストを経済的な等質集団として扱う意図はない。
- 18) ちなみに、この地域で筆者とともに調査を行っていた溝口常俊氏の資料によれば、バラワン開発区内だけで、少くとも60のカーストに属する住民がいる。
- 19) 周辺の村では、ほかにタクル、ガディ(Gaddi)、クルミ(Kurmi)などのカースト世帯の他、少数ながらアラク、テリ、チャマルなどの諸カーストの世帯が、このカテゴリーに属している例がみられる。
- 20) ただし市などでも一般に、カーストごとの「伝統的」な職業による分業の原則は守られている。もっとも近年では一部のムスリムが、大工、床屋、靴屋といった、従来は特定のヒンドゥー・カースト成員のみが従事していた職種に進出してゆく傾向がみられるのも事実である。しかしこれらのムスリムの活動の場は、現在のところ市や町の常設店舗などに限られている。

- 21) ジャジマンの支払う穀物は、重量(場合によっては体積)のみが定められており、種類は規定されていない。しかし一般に、ジャジマンは、もっとも高価な穀物(すなわちラビではコムギ、カリフではコメ)で支払うのが当然であり、バジュラやジョワールのような安価な穀物での支払いは威信にかかわると考えられている。なお、調査時点の定期市での物価と比較すると、コメ60~90ルピー、コムギ40~50ルピー(各1マウンド)に対し、例えばクマールがジャジマンの世帯へ1年間に提供する土器は、全体で60ルピーをこえず、ダヌクの提供するかご、み、竹のマットレスなども80ルピーはこえない。バライやロハールのサービスにいたっては、年間を通じてほとんどなされない場合すらある、という。
- 22) サンディラ郡バラワン開発区の定期市の詳細については、石原潤、溝口常俊氏によって報告がなされる予定である。
- 23) インド北部のパルダについての一般的記述としては、MANDELBAUM : 1988参照。
- 24) 調査期間中、たまたま総選挙が行われたが、市は選挙運動の重要な場であった。ただ、筆者がこれまでに見た南アジアの他の地域の定期市に比べれば、茶店のような、いわば制度化された人々の談笑の場はここにはむしろ少ないように思われる。鹿野 : 1990および、石原、溝口の報告(未刊行)参照。
- 25) 例えば筆者の滞在していたブラーマンの農家には、ディワリー (*diwari*) の祭に際し、プルジャンであるバライ、ナーイ、チャマル、ダヌクと、しばしば農業労働者として雇われるアラクの世帯の女が訪ねてきて、数枚のプリ (*puri* 揚げパン) と一鉢の豆料理を受けとった。一般にプルジャンであっても村外に住む世帯からは、ホーリー以外の祭礼に贈り物をもらいに来ることは少ないという。
- 26) ブラーマンの通過儀礼のうち、他のカースト成員が一定の役割を果たし、また贈与や供応を受ける機会が多いのは、結婚式、子供の出生、ムンダン (*mundan* 子の髪をはじめて切る儀礼)、ウパナヤム (*upanayam* 聖紐ジャネウ *janeu* を初めて着用する儀礼) などである。これらの儀礼にともなう贈与や供応の範囲、内容などには、いうまでもなく、世帯によって著しい差異がある。
- 27) 一般にこの地方のブラーマン農家の場合、娘の結婚に際しては、総収入の2~3年分を費すのは当然であり、その半分は結婚式の費用に、半分は婿やその親族への贈与(「贈与型」の持参財、鹿野 : 1981参照)にあてられ、とされる。結婚する娘本人への持参財(主に金銀製の装身具と衣装で、前者の一部は母親から譲られる)が、これとは別に必要であるが、その数量や金額は、親の意志しだいである、という。
- 28) 配り手は、プルジャンであるナーイの女性(ナイン)である。
- 29) 農民の規範としての日常的消費のつましさと、儀礼的消費の鷹揚さについては、すでに1939年に中国江南の農村の事例から、FEI が指摘している。FEI : 1939, 119-120.
- 30) 調査時に、ロダウラにはカレッジ在学生在が少くとも18名存在した。ロダウラ出身者で高等教育をうけ、現在は職を得て都市に住んでいる者は数名いるが、それらはすべて30才台以下で、40才台以上で、カレッジ以上の教育を受けた者は、確認しうる限りで1名のみである。
- 31) 男性の高い教育水準が高額の持参財を要求しうる条件となっていることを示す例としては、BRADFORD : 1985, CAPLAN : 1984などを参照。
- 32) 野菜の栽培を「伝統的」な職業としているムラオは、このカテゴリーに含めてもよいかもしれない。また、商業を「伝統的」な職業とするバニアの一部は、穀物、布、雑貨などそれ自体は特定のカーストと結びつかない「中立的」な商品を扱うことによって、その他のカーストが供給しえない、外部で生産されるものを村落に供給する役割をになっている。
- 33) ただしトウラが実際に受けとるのは現金で、その額は取り引き額によって一定しておらず、かつ現金の支払い手は農民ではなく、その穀物を買取る仲買人である。
- 34) ロダウラでも、ナーイが村内のバライや近隣のクマールと、それぞれのカーストの職業に基づいて、現金や穀物の支払いなしで、ものやサービスを相互に交換している例が存在するが、そのような例はごく限られており、その重要性はどちらにとっても農民との関係に比べればずっと小さい。
- 35) 鹿野 : 1981参照。
- 36) ウッタラプラデシュ州における土地改革が、農村のさまざまなカテゴリーの住民の経済に及ぼした影響については、WADLEY & DERR : 1989, 102-105, PATHAK : 1987, 72-74など参照。

- 37) ただし、彼らが穀物を換金する場合、必ずしもそれが余剰分であることを意味しない。自家消費分の不足を承知の上で、必要に迫られて収穫直後の、価格の安い季節に穀物を換金し、そのため価格の上昇する端境期にそれを購入しなければならなくなるという悪循環は、下層農民の貧困化の要因として周知の事実であるが、(例えば BHADURI : 1985, 308-310)本稿ではそのプロセスを具体的に検討する準備がない。
- 38) 例えばブラーマンやナーイは、チャマルなどの指定カースト (Scheduled Caste, いわゆる「不可触」カースト) 成員に対してはサービスをしない。
- 39) 農民社会の定義については、SHANIN : 1987, WOLF : 1966 参照。
- 40) 代表的な見解としては、LEWIS : 1958.
- 41) 代表的な見解としては、DUMONT : 1970.
- 42) このことは、ロダウラ周辺ばかりでなく、たとえば現在では人口の大多数がムスリムであるバングラデシュ中部の農村でも、ある程度、確認しうる。鹿野 : 1987, 123.
- 43) ロダウラのあるブラーマン農民は、特定のナーイとジャジマニ関係を結び、定期的にサービスをうけているにもかかわらず、しばしばアトラウリの定期市で、ムスリムの床屋に調髪をさせていた。その理由は、「アトラウリの方が、モダンな髪型にしてくれる」ためであった。
- 44) 代表的な見解としては、BREMEN : 1974.
- 45) ジャジマニ関係の維持にとって、パルダの順守が重要な意味をもつことについては、WADLEY & DERR : 1989, 107-108 参照。ロダウラ周辺でも、上層カーストの女性のパルダはかなり厳しく守られているが、ジャジマニの家を定期的に訪れるナイン (ナーイの女性) は、女性間のメッセンジャーとしてきわめて重要な役割をはたしている。この地方におけるナーイの位置づけと役割については、筆者は別稿で改めて検討する予定である。
- 46) このような指摘は、典型的には、WISER : 1936.
- 47) 市は、場合によってはエリート層の「贅沢な」消費 (それ自体が、しばしば非エリートへの分配の機能をもつ) のディスプレイの場であり、それを通じての威信獲得の場でありうることを、筆者は東部ネパール山地の事例に基づいて報告したことがある。鹿野 : 1990.
- 48) ただし、市においてもなお、ある種のものやサービス (鍛冶、大工、土器、調髪・ひげそりなど) を扱うのは、ムスリムを除けば、特定カースト成員に限られている、という意味で、市は必ずしも完全に「自由」な交換の場ではない。鹿野 : 1987, 123 参照。
- 49) ジャジマニの支払いの性格を、技術的サービスに対するそれと、儀礼的なサービスに対するそれとに区分する必要性が、PARRY その他によって指摘されている。ただ、ロダウラの場合、ジャジマニがブラーマンであるために、両者の区分は明確になりにくく、プルジャンのみでなく、司祭職をつとめるブラーマンへの支払いも一括して「施し」の性格をおびる傾向がある。PARRY : 1979, 76-81.
- 50) 例えば里帰りから婚家へもどる際には、女性や子供は、実家で贈られた衣装を身に着けるのが普通である。里帰りから婚家へもどる女性は、実家を出る際に号泣するのが習慣となっており、それを聞いて近隣の女達が見送りに出て来るが、それは女性がどれだけのものを実家から受けとってゆくかを確認する機会ともなる。
- 51) 一般に持参財とよばれる、ただし実際には与妻者から取妻者への半ば強制された贈与が、南アジアでは社会的に厳しい批判を浴び、法的規制まで受けながら、なお現在も拡大しつつある原因の一つは、この点にあるといえよう。鹿野 : 1985 参照。
- 52) 社会的上位者への贈与と下位者への贈与の意味の対比については、ムスリムの事例であるが、WERBNER : 1990 が示唆に富む。
- 53) RAHEJA は、やはり北インドの事例を通じて、贈与はしばしば、それを与える者が、本来は自らがなう一定の不吉さや危険を、贈与を通じてその受け手へ転化する意味をもっており、この転化は与え手と受け手の社会的地位の上下には関係なくなされると述べている。RAHEJA : 1988. この指摘はきわめて興味深いのが、本稿では資料不足からこの問題に立ちいる用意がない。ただ、同様のことがロダウラ周辺の事例に適用できるとしても、それによって、本稿における贈与と威信の関係についての理解は、特に影響を受けないと

考えている。

- 54) この問題についての比較的まとまった論考としては、たとえば PARRY : 1979, 270-296 参照。
- 55) この問題は、当然 DUMONT 以来論じられてきたヒンドゥー社会のエリートとしての「王」と「司祭」の役割や相互関係、さらには与妻者と取妻者、世帯主と年長者の関係などの、さまざまな問題と結びついて発展してゆくが、本稿では本格的に論ずる用意がない。DUMONT : 1970, MARGLIN : 1977 など参照。
- 56) それは、典型的には持参財制の階層や宗派をこえた拡大としてあらわれている。たとえば IFEKA : 1989, MILLER : 1981, WEBNER : 1990 など参照。

参 考 文 献

- BHADURI, A.
1985 Class Relation and Commercialization in Indian Agriculture : A Study in the Post-Independence Agrarian Reform of Uttar Pradesh, in RAJ, K.N. & others ed. *Essays on the Commercialization of Indian Agriculture*, Oxford Univ. Press, 306-318
- BRADFORD, N.J.
1985 From Bridewealth to Groom-fee ; Transformed Marriage Custom and Socio Economic Polarization among Lingayat, *Contributions to Indian Sociology (N.S.)* 19-2, 269-302
- BREMAN, J.
1974 *Patronage and Exploitation*, Univ. of California Press
- CAPLAN, L.
1984 Bridegroom Price in Urban India ; Class, Caste and "Dowry Evil" among Christian in Madras, *Man (N.S.)* 19, 216-233
- DUMONT, L.
1970 *Homo Hierarchicus*, Vikas Publications
- FEI HSIAO TUNG
1939 *Peasant Life in China*, Routledge & Kegan Paul
- FULLER, C.J.
1989 Misconceiving the Grain Heap ; A Critique of the Concept of the Indian Jajmani System, in PARRY, J. & M. BLOCH ed. *Money and the Morality of Exchange*, Cambridge Univ. Press, 33-63
- IFEKA, C.
1989 Hierarchical Woman ; The "Dowry" System and Its Implication among Christians in Goa, *Contributions to Indian Sociology (N.S.)* 23-2, 261-284
- LEWIS, O.
1958 *Village Life in Northern India*, Random House
- MANDELBAUM, D.
1988 *Women's Seclusion and Men's Honor ; Sex Role in North India, Bangladesh and Pakistan*, The Univ. of Arizona Press
- MARGLIN, F.A.
1977 Power, Purity and Pollution ; Aspects of Caste System Reconsidered, *Contributions to Indian Sociology (N.S.)* 11-2, 245-270
- MILLER, B.D.
1981 *The Endangered Sex ; Neglect of Female Children in Rural North India*, Cornell Univ. Press
- PARRY, J.P.
1979 *Caste and Kinship in Kangra*, Routledge & Kegan Paul

PATHAK,S.N.

1987 *Land Reform and Change in Rural Society*, Chugh Publication

RAHEJA,G.G.

1988 *The Poison in the Gift ; Ritual, Prestation and the Dominant Caste in a North Indian Village*, The Univ. of Chicago Press

SHANIN,T.

1987 Introduction ; Peasantry as a Concept, in SHANIN,T. ed. *Peasants and Peasant Societies* (2nd ed.), Basil Blackwell, 1-12

SRINIVAS,M.N.

1959 The Dominant Caste in Rampura, *American Anthropologist* LXI, 1-16

WADLEY ,S. & B.W.DERR

1989 Karimpur 1925-1984 ; Understanding Rural India through Restudies, in BARDHAN,P. ed. *Conversations between Economists and Anthropologists*, Oxfrd Univ. press, 76-126

WERBNER,P.

1990 *The Migration Process ; Capital, Gifts and Offering among British Pakistani*, Berg

WISER, W.H.

1936 *The Hindu Jajmani System*, (2nd ed.1958), Lucknow Publishing House

WOLF,E.

1966 *Peasants*, Prentice Hall

The Census of India 1981

Part X III -A, Village and Town Directory, District Hardoi

鹿野勝彦

1977 「社会人類学におけるジャジマニ・システム論の問題点」、『アジア・アフリカ言語文化研究』13、154- 168

1981 「インドにおける dowry 制についてーカラクの例を中心に」、『リトルワールド年報』4、30-48

1985 「ダウリーをめぐる社会関係」、『文化人類学』1、211-226

1987 「ベンガル農村のクマール(土器つくりカースト)」、『民族学研究』52- 2、103-128

1990 「定期市における経済関係と社会関係」、『民族文化の世界(下)、社会の統合と動態』小学館、33-54